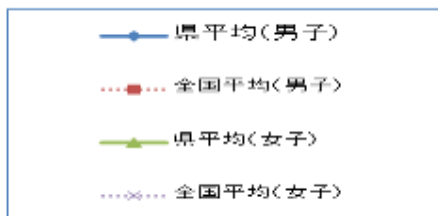


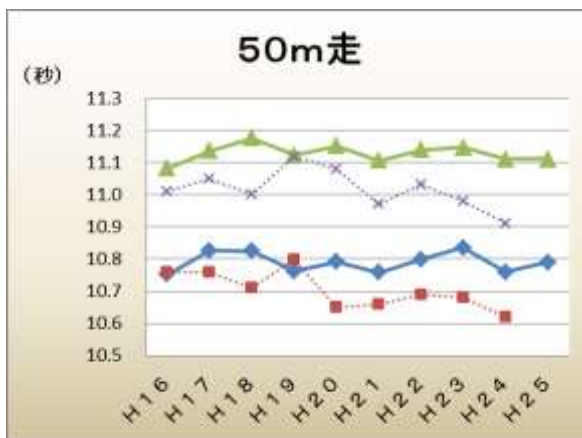
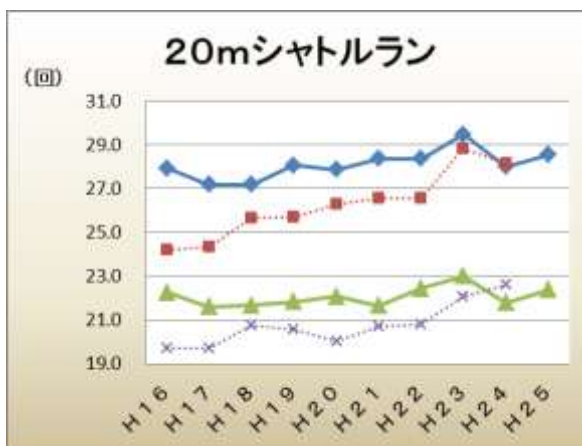
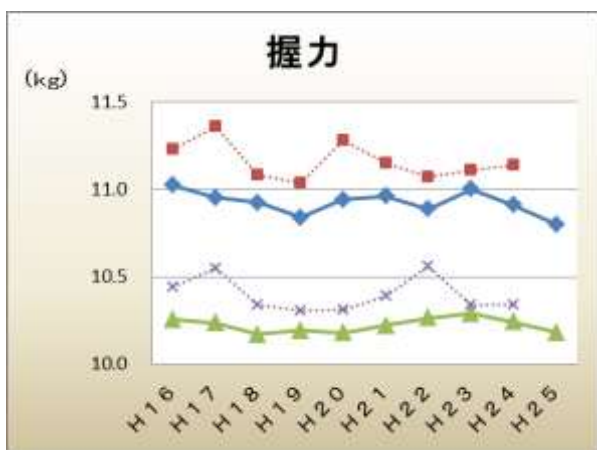
2 過去10年間の調査結果の推移及び本年度調査結果と県基準値との比較

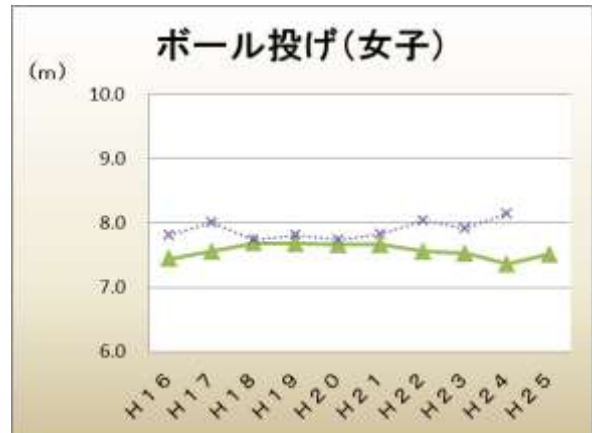
小学2年生（7歳）

過去10年間の調査結果の推移



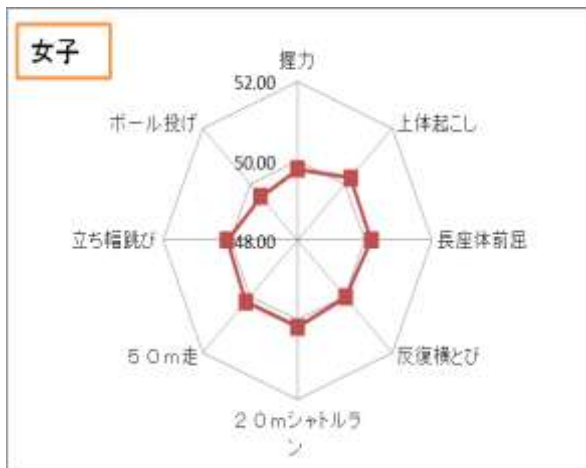
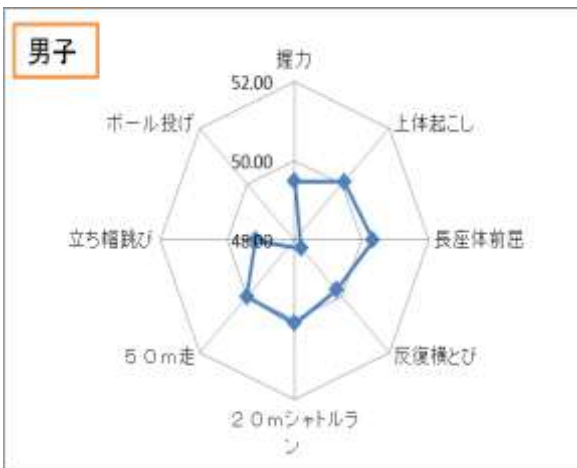
小学校低学年の時期・・・動作の習得は、幼児期から急激に発達し、10歳ごろまでにほぼ100%近くまで発達します。この時期に、いろいろな遊びや運動を経験することが、神経系に様々な刺激を与えて、神経と筋肉の関連をスムーズにして「身のこなし」を形成することに役立ちます。特に体の基本的な動きである、走る、跳ぶ、投げる、泳ぐ、蹴る、ボールをキャッチする、体のバランスを保つ等の多様な動きを遊びを通して経験させておくことが重要です。





熊本県の小学2年生においては、昨年度本県低学年の大きな課題として挙げた、立ち幅跳び、ボール投げで上昇が見られました。今後も、日常から、投げたり跳んだりする全身をダイナミックに動かす遊びが重要と考えます。本年度課題として挙げるのが握力です。生活が便利になり重いものを持ったり手で操作したりする機会が減っています。まずは、全国平均を目標に高めていきましょう。

県基準値を50とした時の本年度の平均値のTスコア



【指導上のポイント】

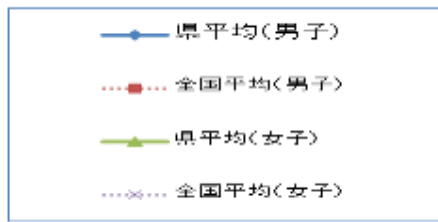
低学年では、ボールの投げ方、弾みをつけた跳び方など、運動の行い方や体の使い方を学ぶ学習も必要です。投げる動作や跳ぶ動作のポイントを示したり、よい動きを引き出す教師の言葉かけを行っていきましょう。また、動きを習得するには経験が必要です。身に付けた動きで遊ぶ機会を学校、家庭においても意図的に増やしていきましょう。

【指導上の参考資料】

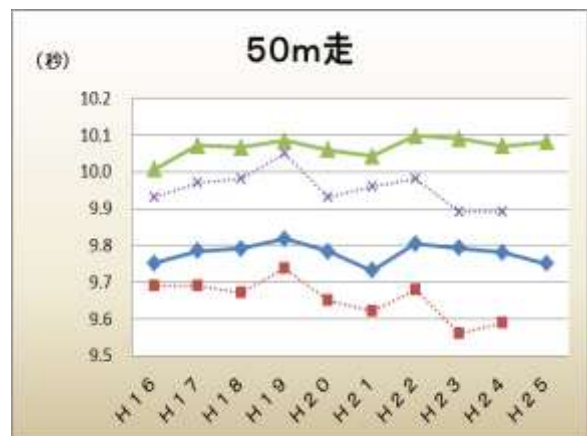
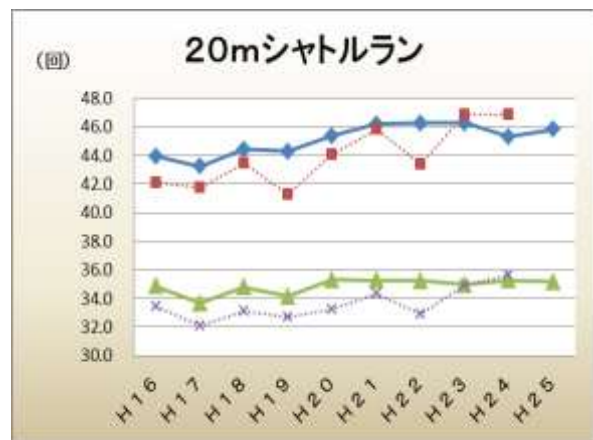
- ・小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック低学年（文部科学省）P 8～13, 36～41
- ・小学校体育指導の手引（熊本県教育委員会）P 19～26

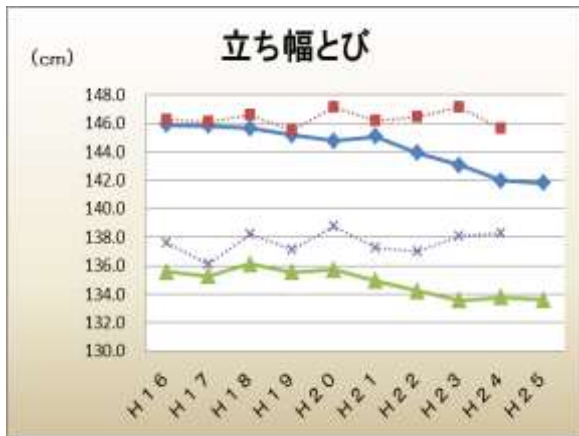
小学4年生（9歳）

過去10年間の調査結果の推移



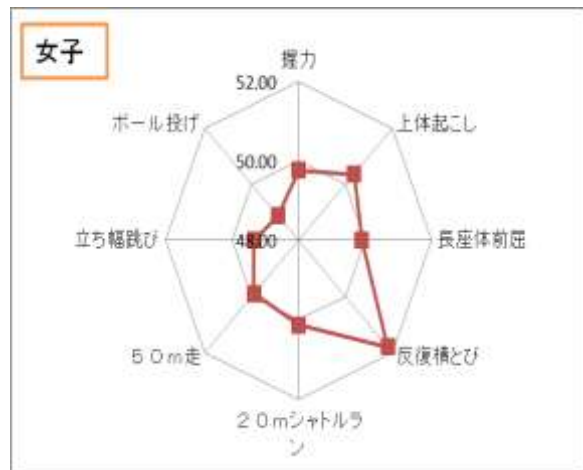
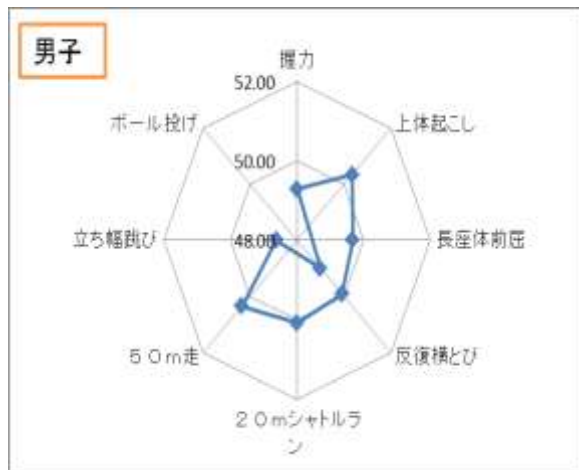
小学校中学年の時期・・・幼児期や小学校低学年の段階をへて、身体の発達面では比較的安定した時期となります。また、歩く、走る、跳ぶ、投げる、捕るなどの基礎的な動きがより洗練されていきます。さらにこの時期は、思春期の発育の準備期でもあり、スポーツに関する興味が芽生え、運動する喜びや意義、他者とのかかわりを意識するなど集団活動に不可欠な社会性に対しても理解を深めることができるようになってきます。





小学4年生においては、全国的にも握力、ボール投げで低下の傾向が見られます。本県では立ち幅跳びでも低下が見られます。多種目の運動経験が運動能力と関連があると言われていることから、多種多様な運動経験が必要です。スポーツに関心が芽生えるこの時期に、たくさんの種目に出会わせ、運動好きな児童を育てていきましょう。すべての子に運動する機会を保ちましょう。

県基準値を50とした時の本年度の平均値のTスコア



【指導上のポイント】

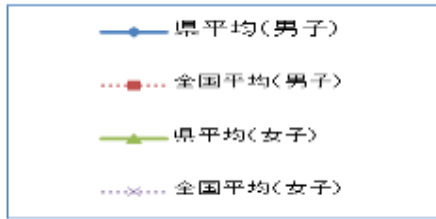
中学年では、運動の基礎となる感覚を育みつつ、基本的な動きや技能を身に付けることを目指します。その際、すそ野の広い多様な運動経験を積ませることが大切です。学習指導要領に示された内容を確実に指導し、そこで身に付けた運動の行い方を活用するためにも、運動部活動をはじめとして運動する機会を意図的に増やしていきましょう。

【指導上の参考資料】

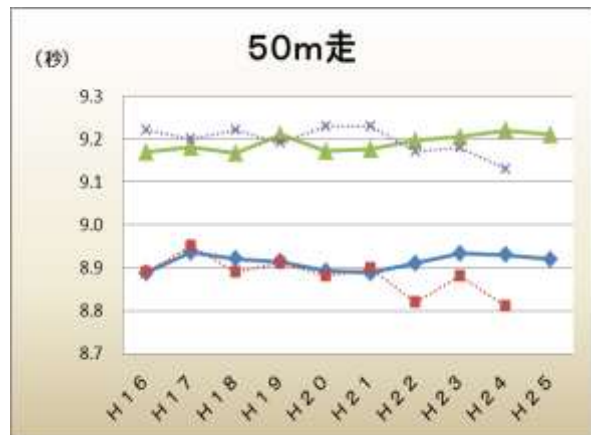
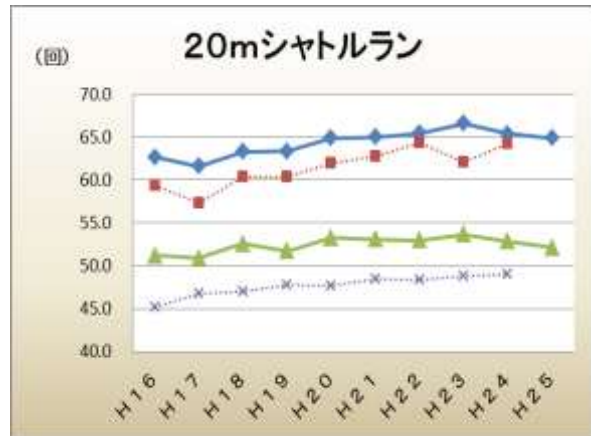
- ・小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック中学年（文部科学省）P 8～13, 28～29, 38～47
- ・小学校体育指導の手引（熊本県教育委員会）P 35～42, 123～130, 203～210

小学6年生（11歳）

過去10年間の調査結果の推移



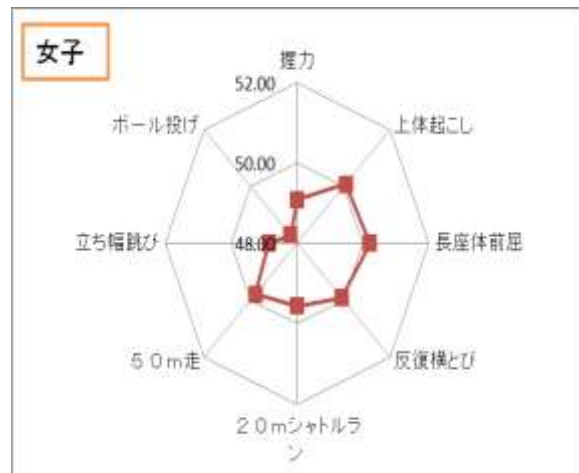
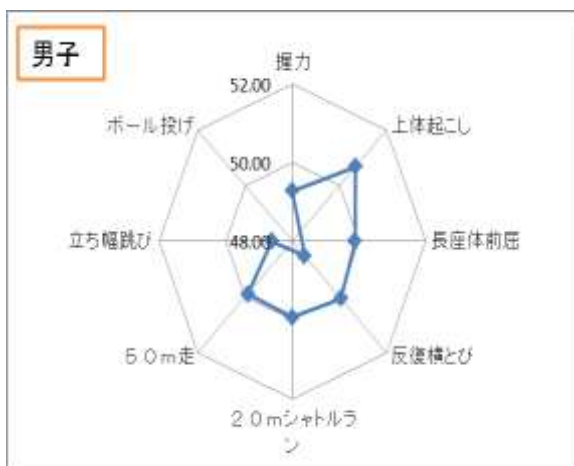
小学校高学年の時期・・・成長の著しい思春期の入り口と言われています。個人差はありますが、身長が急速に伸びたり、心臓をはじめとする内臓器官や骨、筋肉など、運動にかかわる身体の諸機能の著しい発達が見られるようになってきます。またこの時期は、生涯にわたる豊かなスポーツライフの基礎が育つ上でも重要です。子どもたち一人一人に、運動に対する自己肯定感をしっかりと持たせることが大切になります。





本県小学6年生においては、握力、立ち幅跳び、ボール投げが下降しています。また、これまで全国平均を上回っていたシャトルランにおいても下降傾向が見られます。運動する子とそうでない子の二極化が進む時期でもありますので、自分の体や健康・体力に関心を持たせる取り組みを行い、自己の最善を尽くして運動する態度を育てていかなければなりません。

県基準値を50とした時の本年度の平均値のTスコア



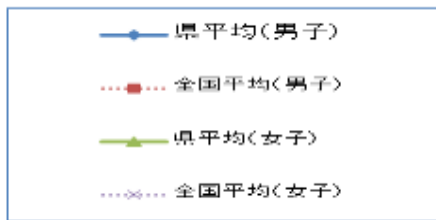
【指導上のポイント】

高学年は、持久力や柔軟性などに個人差が現れてくる時期でもあります。体育学習での運動量を十分確保するとともに、児童が自分の体力の状況やその高め方が分かるような授業の工夫が必要になります。体づくり運動などで学んだ体力の高め方を、運動部活動やスポーツクラブ、日常生活で意識して活用できるような言葉かけを行っていきましょう。

- 【指導上の参考資料】**
- ・小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック高学年（文部科学省）P 8～13, 22～31, 46～47
 - ・小学校体育指導の手引（熊本県教育委員会）P 51～66, 139～154, 227～234

中学2年生（13歳）

過去10年間の調査結果の推移

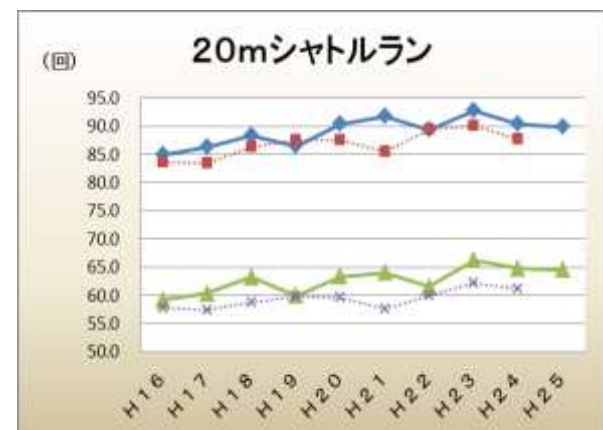
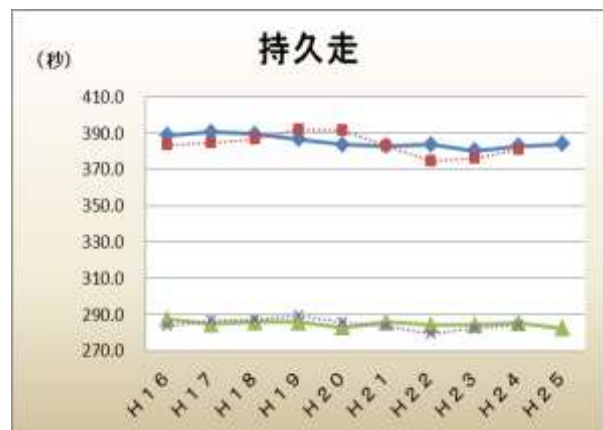
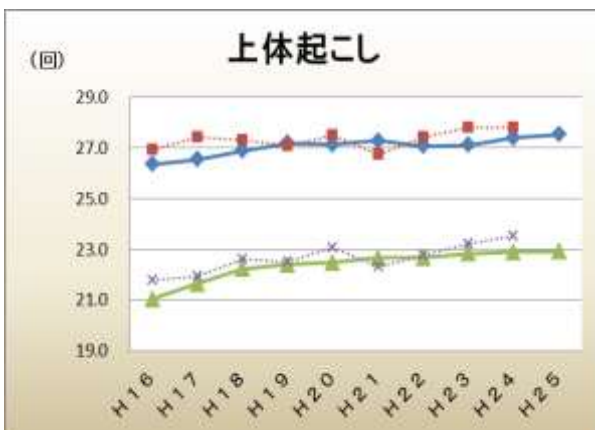
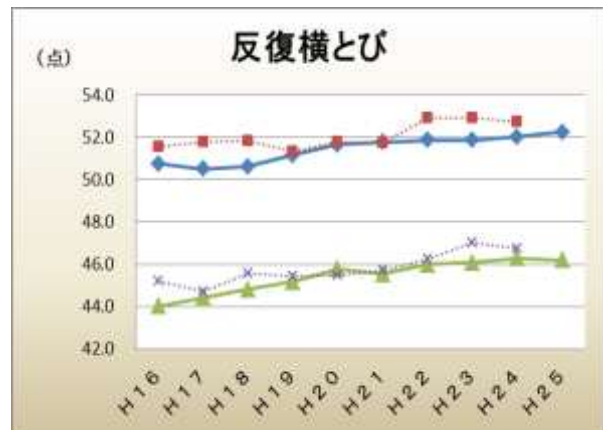
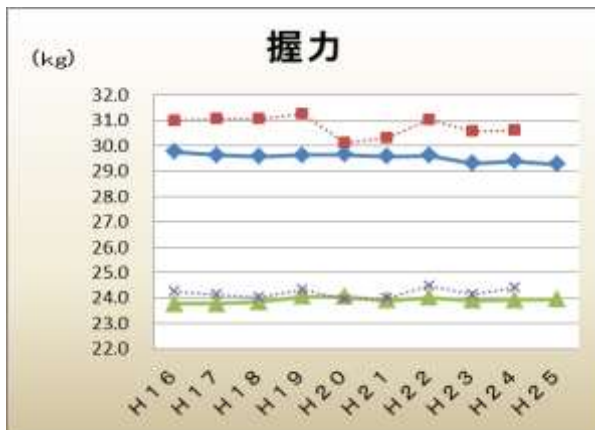


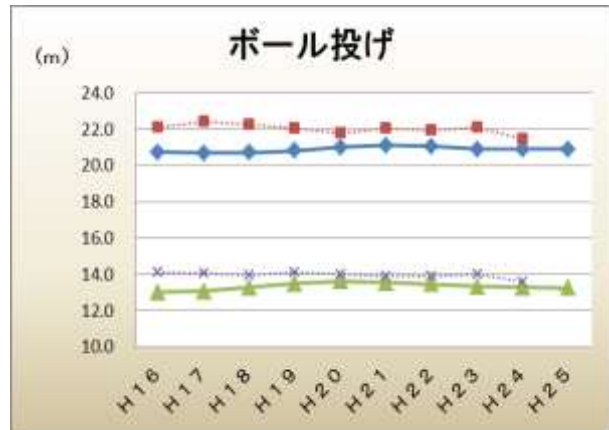
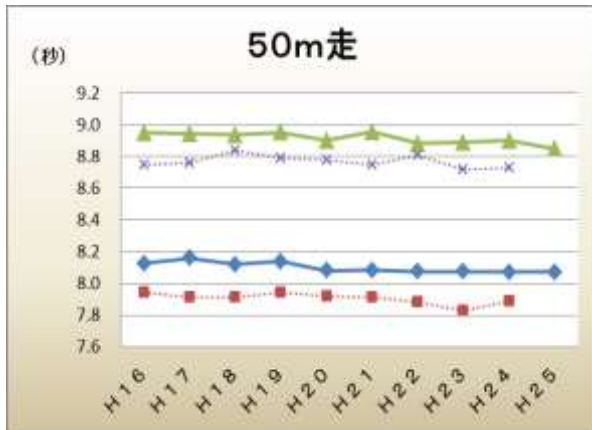
中学生の時期・・・男子は13歳ごろから、女子は11歳ごろから運動しているものとしていないものとの成績の差が大きくなる傾向にあります。

(文部科学省「体力運動能力調査報告書」から)

また、運動習慣の二極化傾向も顕著に進み、運動時間の少ない子どもたちへの働きかけが、体力向上にとっての課題となります。

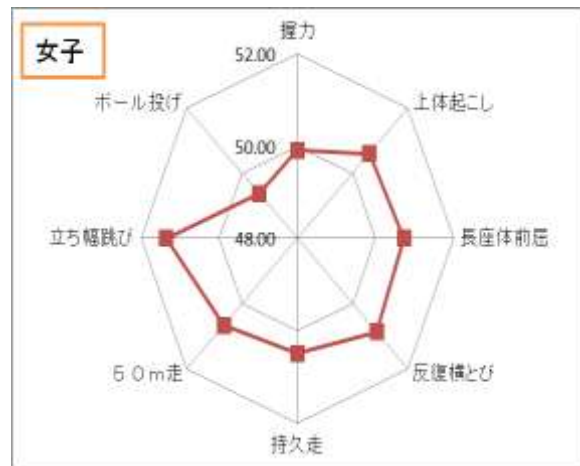
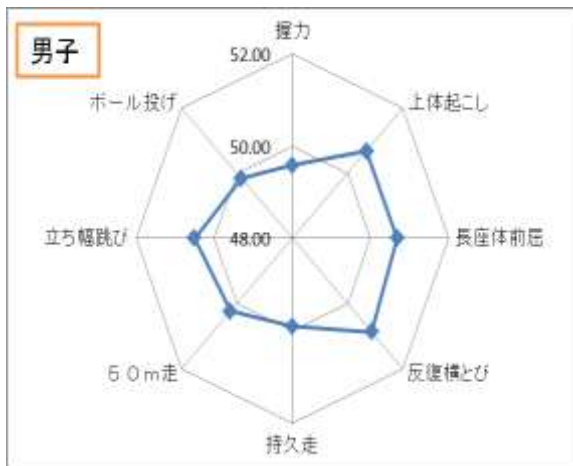
(文部科学省「子どもの体力向上のための取組みハンドブック」から)





中学生の体力は、各年度の記録のばらつきがなく、ほぼ横一線に推移しています。男女共に上体起こし、長座体前屈、立ち幅跳びでは、全国平均は下回っているものの緩やかな上昇傾向が見られます。一方、全国平均は上回っているものの、女子における持久走、シャトルランで低下の傾向が見られます。運動する子とそうでない子の二極化が進む中、各学校における保健体育の授業や運動部活動の質の向上を図り、全国平均を目標に取り組みたいと思います。

県基準値を50とした時の本年度の平均値のTスコア



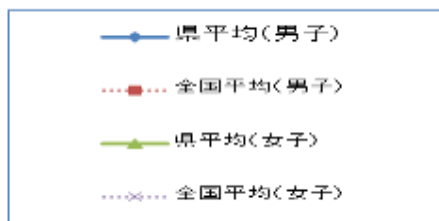
【指導上のポイント】

中学校2年生においては、男女共におおむね県基準値に達しているようです。各学校では授業導入の補強運動などで、新体力テストの結果を基に、体力向上重点項目を設定して取り組むことも有効と考えられます。また、授業での運動量確保と併せて、睡眠や食生活といった生活習慣と体力が密接な関係にあることも指導しなければなりません。

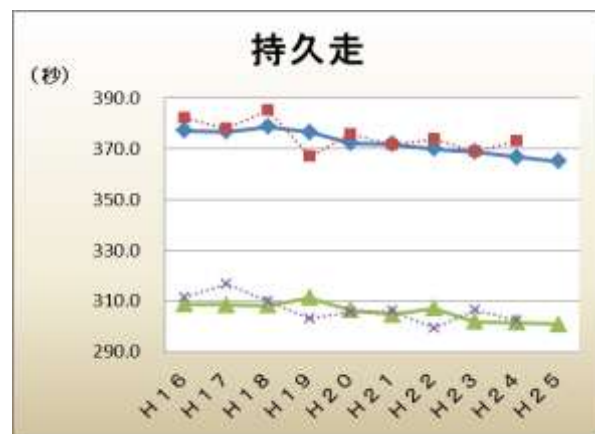
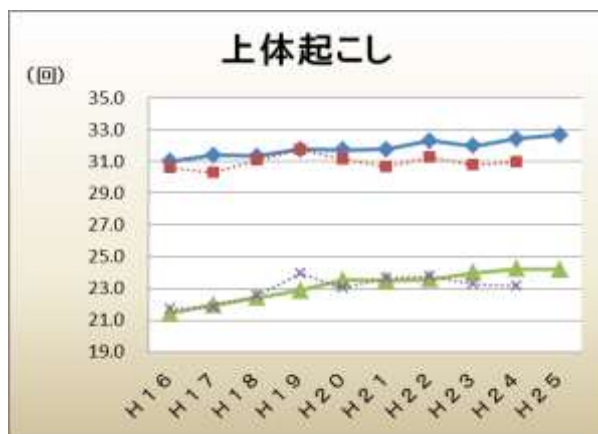
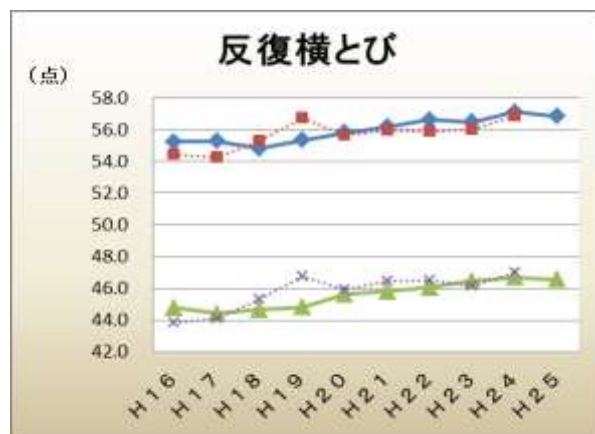
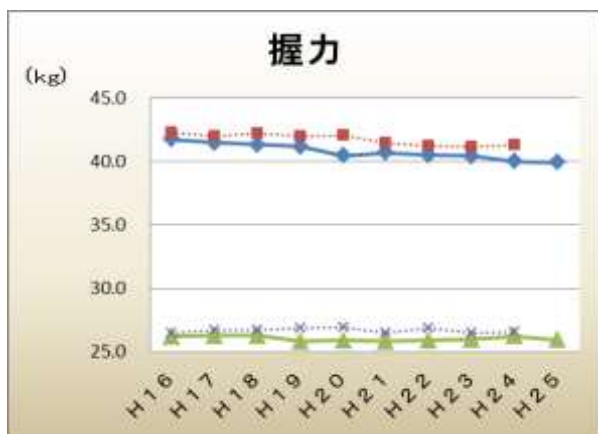
- #### 【指導上の参考資料】
- ・ 中学校保健体育授業づくりハンドブック 各領域における単元の計画と評価 (熊本県教育委員会)
 - ・ 新学習指導要領に基づく中学校・高等学校向け「体づくり運動」「体育理論」リーフレット (文部科学省)
 - ・ 新学習指導要領に基づく中学校向け「ダンス」リーフレット (文部科学省)

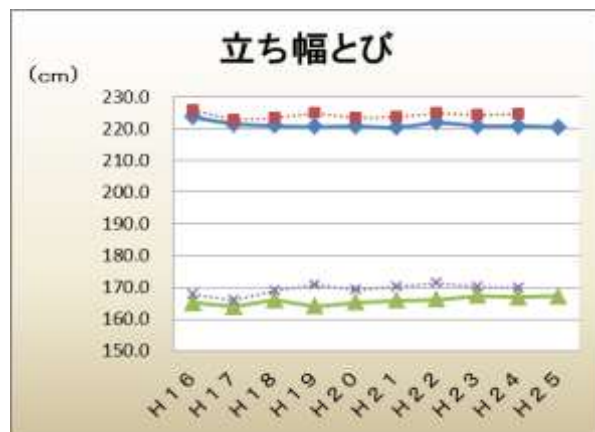
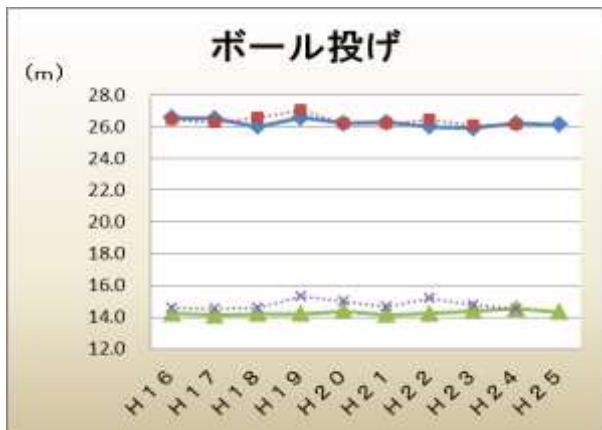
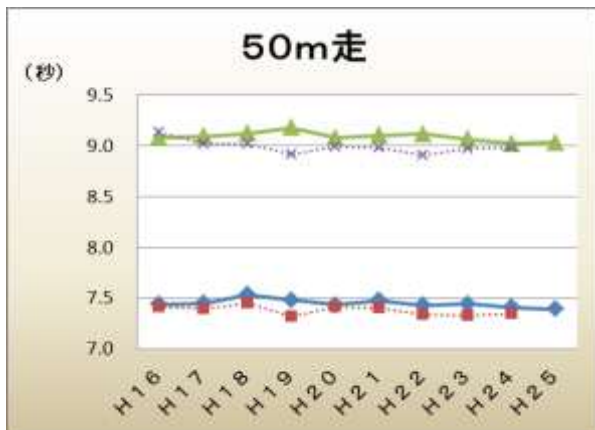
高校2年生（16歳）

過去10年間の調査結果の推移



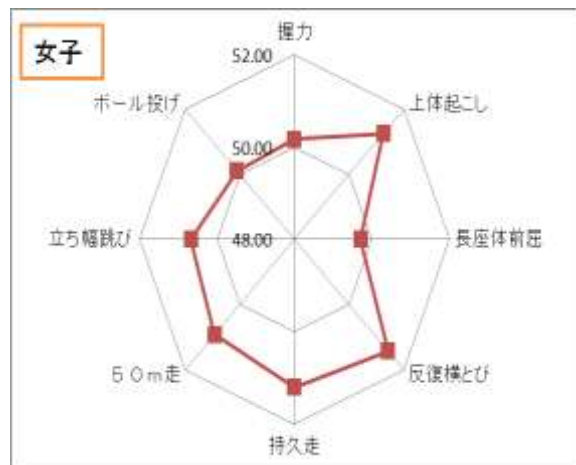
高校生の時期・・・50m走は年齢によって速くなり、女子は13歳ごろでピークに達し、男子は17歳ごろまでタイムが伸びます。20年前より50m走は遅くなる傾向にあります。（文部科学省「体力運動能力調査報告書」より）
この時期に体力水準を高めておくことが重要であり、将来の身体機能の水準に大きく関わってきます。





高等学校の体力は、男女共に上体起こし、50m走については緩やかな上昇傾向が見られています。しかし、握力、長座体前屈、持久走に関しては、全国平均とほぼ同様の結果を得ながらもやや低下傾向にあります。生涯にわたる豊かなスポーツライフを目指して、健康問題に関する生活習慣の見直しも含めて、体力向上に取り組む必要があると言えます。

県基準値を50とした時の本年度の平均値のTスコア



【指導上のポイント】
 高等学校2年生の男子においては、昨年度に引き続き、握力と長座体前屈で県基準値を下回っています。女子については、ほとんどの種目で県基準値を上回っています。今年度から年次進行での新学習指導要領実施となり、「体育理論」で学んだ「知の体育」を「体づくり運動」の実践で生かすなど、自ら体力を高める方法を身に付けさせることも大切です。

- 【指導上の参考資料】**
- 高等学校保健体育指導の手引（熊本県教育委員会）
 - 新学習指導要領に基づく中学校・高等学校向け「体づくり運動」「体育理論」リーフレット（文部科学省）
 - 高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編（文部科学省）